

## 世親の『法華論』について

望月海慧

はじめに

『妙法蓮華經憂波提舍』（『法華論』大正一五一九、一五二〇）の著書である世親（ヴァスバンドウ）は、インド仏教史において兄の無著（アサンガ）とともに瑜伽行唯識派の思想を大成した論師として知られている。『唯識三十頌』や弥勒（マイトレーヤ）と無著による瑜伽行唯識文献に対する解説書も著しているが、最もよく読まれた著書は『阿毘達磨俱舍論』であろう。経量部的思想内容を考察するというよりも、南都六宗の俱舍宗に見られるように、仏教の教義を学ぶための教科書的な読まれ方をしたためである。もちろん、唯識思想の代表的な著作は『唯識三十頌』であり、護法の注釈書である『成唯識論』とともに多くの研究が行われてきた。これらの著書を中心にして、経量部的思想を判断基準にした世親二人説や、小乗から大乘への転向という視点で、彼の思想体系が考察されてきた。

その一方で、彼に帰せられる大乘經典の注釈書が、『法華論』を始めとして、多く存在する。その中には、その著者に問題がある注釈書もあり、近年に大竹晋による研究がまとめられるまで総合的な研究がなされてこなかった。<sup>1</sup>インド仏教史においてどのように、經典の注釈書を多く著している論師は世親のみである。それを彼の特徴と言うこともできるが、インド仏教のその後の展開は、經典よりも論書に重点をおく傾向となる。そのためなのか、これらの注釈書がその後の論書において言及されること

はほとんどなく、『法華論』に関しても、インドの文献資料にその痕跡を見つけることはできていない。それ故に、經典の注釈者としての世親のイメージは、すでにインド仏教の段階で忘れられていたことになる。また、そのことは、東アジアにおいて認識されている經典の注釈者としての世親のイメージに違和感を与えることにもなる。

## 一 大乘經典の注釈書

本稿では、そのような問題を論じる場ではないが、そのことを踏まえた上で、彼の注釈書文献を確認してみる。まず、現存する漢訳文献を大正新脩大藏經の目録に基づいて示すと、次のようになる。

- 『金剛般若波羅蜜經論』<sup>②</sup>（大正一五二一）
- 『金剛仙論』<sup>③</sup>（大正一五二二）
- 『能斷金剛般若波羅蜜多經論積』<sup>④</sup>（大正一五二三）
- 『妙法蓮華經憂波提舍』<sup>⑤</sup>（大正一五一九、一五二〇）
- 『十地經論』<sup>⑥</sup>（大正一五二二）
- 『無量壽經優波提舍』<sup>⑦</sup>（大正一五二四）
- 『寶髻經四法憂波提舍』<sup>⑧</sup>（大正一五二六）
- 『涅槃論』<sup>⑨</sup>（大正一五二七）
- 『涅槃經本有今無偈論』<sup>⑩</sup>（大正一五二八）
- 『遺教經論』<sup>⑪</sup>（大正一五二九）

『文殊師利菩薩問菩提經論』<sup>(12)</sup>（大正一五三二）

『勝思惟梵天所問經論』（大正一五三二）

『轉法輪經憂波提舍』<sup>(13)</sup>（大正一五三三）

『三具足經優波提舍』<sup>(14)</sup>（大正一五三四）

『六門陀羅尼經論』（大正一三六一）

『發菩提心經論』（大正一六五九）

最初の三論は、いずれも『金剛般若經』に関する解説書であるが、複雑な事情がある。すなわち、『金剛般若波羅蜜經論』と『能断金剛般若波羅蜜多經論釈』は、無著に帰せられる『能断金剛般若波羅蜜多經論頌』（大正一五一四）に対する注釈書であるのに対して、『金剛仙論』は、『金剛般若波羅蜜經論』に対する複注とされており、その著者性に問題がある。続く、『妙法蓮華經憂波提舍』、『十地經論』、『無量寿經優波提舍』は、東アジア仏教でよく読まれた『法華經』、『華嚴經』、『無量寿經』に対する注釈書である。このうち、『妙法蓮華經憂波提舍』については、『大乘莊嚴經論』、『撰大乘論釈』との関係から、世親の著作と認識されている。『十地經論』にはチベット語訳も存在し、唯識思想と唯心偈の関係からも、世親の著作と認識されている。『無量寿經優波提舍』については、その著者性は疑われていないが、インドの論書における『無量寿經』への依拠の度合は中国仏教のものとは異なっていることを確認する必要がある。『涅槃論』と『涅槃經本有今無偈論』は、『大般涅槃經』に対する注釈書であるが、前者は、『菩薩品』における「本有今無偈」に対する注釈書であり、後者は、諸品を七種にまとめたものと「長寿品」の偈頌に対する注釈書となっており、いずれもが經典全体を扱ったものではなく、世親の著者性は疑われている。『遺教經論』は、鳩摩羅什訳の『仏垂般涅槃略説教誡經』に対する注釈書とされているが、同経はアシュヴァゴーシャの『ブッダチャリタ』の「大般涅槃品」の散文訳と確認されており、世親の著者性も疑われている。『文殊師利菩薩問菩提經論』は、チベット語訳では『伽耶山

頂經解説』となっており、經典の名称が異なっている。『勝思惟梵天所問經論』は、『勝思惟梵天所問經』に対する注釈書であるが、同經は世親の『大乘莊嚴經論釈』にも引用を確認することができる。<sup>(15)</sup>『寶髻經四法憂波提舍』、『轉法輪經憂波提舍』、『三具足經憂波提舍』の三論は、いずれもが經典全体に対する注釈書ではなく、經典の一部に対する解説書である。まず、『寶髻經四法憂波提舍』は『集一切福德三昧經』に説かれる三資糧、『轉法輪經憂波提舍』は『力莊嚴三昧經』に説かれる二加持、『三具足經憂波提舍』は『大集經』の「寶髻菩薩品」に説かれる四法に対する注釈書である。『六門陀羅尼經論』は、玄奘による漢訳もある『六門陀羅尼經』に対する注釈書である。最後の『發菩提心經論』は、『菩提心論』と呼ばれていたものに經の語が後に付されたものであり、中国において複数の經典に基づいて編纂されたものとされている。

チベットに伝承した世親に帰せられる注釈書をチベット大藏經のテンギル目録により見ると、次のようになる。

『仏母能斷金剛般若波羅蜜多七義広釈』（東北三八一六）

『仏隨念広注』<sup>(16)</sup>（東北三九八七、大谷五四八七）

『二頌疏』<sup>(17)</sup>（東北三九八八、大谷五四八八）

『六門陀羅尼解説』（東北三九八九、大谷三五一八、五四八九）

『四法解説』（東北三九九〇、大谷五四九〇）

『伽耶山頂經解説』（東北三九九一、大谷五四九二）

『十地解説』<sup>(18)</sup>（東北三九九三、大谷五四九四）

『無尽意所説広注』<sup>(19)</sup>（東北三九九四、大谷五四九五）

『緣起初分分別疏』（東北三九九五、大谷五四九六）

『普賢行願讃注』（東北四〇一五、大谷五五一六）

『頌集論』（東北四一〇三、大谷五六〇四）

『仏母能斷金剛般若波羅蜜多七義広釈』は、『金剛般若経』に対する注釈書であるが、漢訳の『金剛般若波羅蜜経論』と『能斷金剛般若波羅蜜多経論釈』とは異なる注釈書であるだけでなく、本論の漢訳である『金剛般若論』（大正一五一〇）ではその著者は無著となっている。『仏随念広注』は、『仏随念経』に対する無著による注釈書『仏随念注』の複注である。<sup>(21)</sup>『一頌疏』と『頌集論』は、二一偈よりなる初期經典のアンソロジーに対する注釈書であり、前者は後者より一偈のみを取り出したものである。『四法解説』は、『大乘四法経』に対する注釈書であり、敦煌出土の文献に世親に帰せられる『大乘四法経釈』、また著者不明の『大乘四法経釈』（大正一五三五）も存在するが、同名經典も複数存在し、それらを含めた詳細な調査を必要とする注釈書である。<sup>(22)</sup>『無尽意所説広注』は、『大宝積経』の『無尽意経』に対する注釈書であるが、北京版では著者名が付されておらず、世親以後の安慧の著書が引用されていることから、その著者性に問題がある。『縁起初分分別疏』は、『雜阿含』の『縁起経』の注釈書という体裁であるが、『分別縁起初勝法門経』に依拠して自身の十二支縁起説をまとめたものである。<sup>(23)</sup>『普賢行願讃注』は、『華嚴経』「入法界品」末尾の「普賢行願讃」に対する注釈書であるが、チベットにおいて世親の著者とされるようになったものであり、その著者性に問題がある。

これらの注釈書のうち、漢訳とチベット語訳の両者が現存している注釈書は、『六門陀羅尼経論』と『十地経論』と『伽耶山頂経解説』（漢訳『文殊師利菩薩問菩提経論』）のみである。<sup>(24)</sup>このことは、世親に帰せられる注釈書文献の伝承は、中国とチベットで相違していたことだけでなく、その伝承過程に問題があったことを想起させる。すなわち、そのどちらにも世親の著者性が疑われる文献が複数存在していることは、經典の注釈書を世親の著書にしたかった者たちがいたことを意味している。インド仏教において、世親ほど經典に対する注釈書を著した論師は存在しないが、そのことが逆に偽書を創作させたのかもしれない。

## 二 『法華論』のテキスト

『法華論』のテキストについては、その断片も含めて、インドの資料を確認することはできていない。それ故に、『法華論』については、翻訳資料からしか確認できないことになる。

漢訳については、前述のように二種類の漢訳が現存する。

菩提留支訳『妙法蓮華経憂波提舍』（大正一五二九）

勒那摩提訳『妙法蓮華経憂波提舍』（大正一五二〇）

前者はインドのボーディルチが曇林らとともに、後者はインドのラトナマティが僧朗らとともに翻訳したものである。いずれもが、六世紀前半に翻訳されており、両者の翻訳に一致する部分が多いことから、前者は後者の改訂とみなされている。

チベット語訳については、現存しないものの、目録にその翻訳の痕跡を確認することができる。チベット仏教前伝期の九世紀に編纂された『デンカルマ目録』には記載がないが、同時代に編纂された『パンタンマ目録』では、「阿闍梨たちによる著作」の項目に『法華論』を見ることができる。

七三六 『聖法華経釈』阿闍梨ヴァスバンドウ作<sup>(25)</sup>

同時代の前者に掲載されていないことから、その所蔵先の問題なども想定することもできるが、この情報は後伝期の十三世紀に編纂されたチョムデンリクレル（一二二七—一三〇五）の目録によっても「経疏部」の二五番に確認できる。<sup>(26)</sup>さらに、同時代

の一二九〇年に中国で完成した漢籍目録である『至元法宝勘同総録』もチベット語訳の存在を示している。<sup>(27)</sup>

梵云薩怛囉（二合）麻遼怛唎迦沙悉特囉妙法蓮華經論一卷天親菩薩造元魏天竺三藏勒那摩提共僧朗譯右五論一十一卷同峽都字號法華經論二卷（或一卷）元魏天竺三藏菩提留支共曇林譯右二論同本異譯與蕃本同

ここでは、『法華論』に二種の漢訳が存在していることと同時に、それらがチベット語訳と同じであることを伝えている。しかしながら、これらの目録の後の時代にチベットで編纂されたプトウン・リンチェンドウプ（一二九〇―一三六四）の目録では、同論は「それらを探すべきである」の項目に見られ、散逸していることを示している。<sup>(28)</sup> このことは、チヨムデンリクレルの目録からプトウン・リンチェンドウプの目録の間に『法華経』のチベット語訳が失われたことを意味している。<sup>(29)</sup>

また、基の『法華玄賛』のチベット語訳に、『法華論』のチベット語訳の断片を見ることができ、漢文の『法華玄賛』に引用される漢訳の『法華論』からのチベット語訳ではない。<sup>(30)</sup> ただし、チベット語訳者は、『法華玄賛』においてタイトルを付さずに言及される『法華論』に対して、独自にヴァスバンドウの名前を添えていることから、『法華論』を彼の著作として認識していたことが確認できる。<sup>(31)</sup>

『法華論』の現代語訳については、次のものがある。

- ・清水梁山「国訳妙法蓮華経優婆提舍」『国訳大蔵経 論部五』国民文庫刊行会、一九三二
- ・藤井教公<sup>(32)</sup>「世親『法華論』訳注(1)―(3)」『北海道大学文学部研究科紀要』第一〇五号、第一〇八号、第一一一号、二〇〇一、二〇〇二、二〇〇三
- ・大竹晋「法華経論」『新国訳大蔵経釈経論部一八 法華経論・無量寿経論他』大蔵出版、二〇一一

- ・ Terry Rae Abbott, "The Commentary on the Lotus Sutra," *Tiantai Lotus Texts*, BDK Tripiṭaka Translation Series, 2013, Berkeley: Bukkyō Dendō Kyōkai America, pp. 83-149.

このうち、清水と大竹によるものは、漢文を訓読したものである。藤井によるものは、訓読に加え、現代日本語訳がなされている。最後のアボットによるものは、一九八五年に提出された学位論文に付された英訳に基づくものである<sup>(33)</sup>。『法華論』の複注については、次のものが現存する。

吉蔵『法華論疏』（大正一八一八）

義寂・義一『法華經論述記』

円珍『法華論記』

最初の中国の三論宗の吉蔵（五四九―六二三）は、『法華玄論』、『法華義疏』、『法華遊意』、『法華統略』の『法華經』の注釈書を著しており、これらの著書においても『法華論』の引用を多く見ることができることから、世親の『法華論』は彼の法華経理解において重要な解説書であったことがわかる<sup>(34)</sup>。新羅の義寂の『法華經論述記』は、義寂の説を義一が著したものとされるが、上巻の途中で欠落している<sup>(35)</sup>。日本の天台宗の円珍（八一四―八九二）には、『法華論四種声聞日記』<sup>(36)</sup>もあるが、その著者は明らかにっていない。また、天台宗の最澄には、『法華論科文』が現存するだけでなく、複数の注釈書を著した記録が残っている。さらに、この他にも中国・新羅・日本において複数の注釈書が著された記録が残っていることから、『法華論』は東アジアにおいてよく読まれていたことがわかる<sup>(38)</sup>。



### 三 『法華論』の概要

『法華論』は、『法華經』の經文を語句ごとに解説するものではなく、經典の内容について各章の構成を分析する形で紹介するものである。<sup>39)</sup> ただし、その注釈スタイルは、統一されたものではなく、論が進むにつれて崩れていく。すなわち、序品では、全体の構成を七種功德成就と設定した上で解説を進めるのに対して、方便品では、全体の構成を示すことなく、引用した冒頭の經文を解説するものの、後半は省略されている。譬喻品では、二偈に対する解説のみで、途中から他の章の内容の解説に言及し、經典全体の構成を解説する内容に変わっていく。このことは、論書全体の構成が散漫なものであり、完成された著作ではない印象を与えている。以下に、注釈の本文にしたがって、全体の内容をまとめてみる。

#### (一) 序 品

冒頭部分「是の如く我れ聞けり」から「能く無数百千衆生を度せり」までの冒頭の經文を引用した後に、序品の内容を、(1)序分成就、(2)衆成就、(3)如来欲說法時至成就、(4)依所說法威儀隨順住成就、(5)依止說因成就、(6)大衆現前欲聞法成就、(7)文殊師利菩薩答成就の七種の功德成就により解説する。

最初の序分成就については、法華經が諸法門の中でも最高であるという最勝義成就と、自在なる功德をもつという自在功德義成就の二種の勝義の成就により示される。このことを示す經文が、「婆伽婆は王舎城の耆闍崛山中に住したまい」であり、王舎城と耆闍崛山がすべての山と城よりも勝れているように法華經が最勝義であるとする。

第二の衆成就については、数と行と摂功德と威儀如法住の四種の成就に分けられる。数成就は、大衆が無数であることである。

第二の行成就は、声聞による小乗の行、菩薩による大乘の行、菩薩による神通自在を示現する行、声聞による一定した威儀、との四種に分けられる。第三の摂功德成就は、声聞功德成就と菩薩功德成就に分け、經文が解説される。すなわち、前者は、上上

起門、総別相門、摂取事門の三種の観点から「皆是れ阿羅漢なり」以下の十六句が解説される。後者は、上支下支門と摂取事門の二種の観点から「皆阿耨多羅三藐三菩提において不退転にして」以下の十三句が解説される。また、両者に共通な功德の成就として、依るべき処、心、智、境界行と能弁の観点から解説される。第四の威儀如法住については、衆の圍繞、前後の威儀、供養恭敬・尊重讃歎の観点から「その時、世尊は四衆に圍繞・供養・恭敬・尊重・讃歎せられて」の経文が解説される。

第三の如来欲説法時至成就については、大乘經の十七種の異名により「大乘經……を説きたもう」以下の経文が解説される。

第四の依所説法威儀隨順住成就については、いかなるものにより教えが説かれているのかについて、三昧成就と器世間と衆生世間の三種に分けられる。このうち、三昧の成就是、さらに、自在なる力の成就と一切の障礙を離れる成就とに分けられ、「仏は此の經を説き已って結跏趺坐し」以下の経文が解説される。また、器世間と衆生世間については、世間を振動させることと過去の無量劫の事を知ることとされ、「是の時天は曼荼羅花を雨し」以下の経文が解説される。

第五の依止説因成就については、大衆に不可思議事を示現することで彼らに希有なる心が生じて教えを聞こうとすることであるととし、「その時、仏は眉間白毫相より光を放ち」から「七宝の塔を起つるを見る」までの経文が解説される。

第六の大衆現前欲聞法成就については、法を聞こうとする大衆が現れていることであるととし、弥勒菩薩がこの大相を示す意味について質問をする「今、仏世尊は神變の相を現じたもう」以下の経文が解説される。大衆の中から文殊菩薩一人が選ばれた理由については、彼は功德と智慧の所作の成就と、一切智と大法を説く因果の成就を具えているからであるとし、「種種異なる仏国土」以下の経文が解説される。

第七の文殊師利菩薩答成就については、文殊菩薩の過去の記憶による因相と果相と十事の成就により弥勒菩薩の質問に対して答えることができるとし、最初の偈頌に続く散文の「その時、文殊師利は」以下の経文が解説される。すなわち、因相は諸国土における種々なる修行であり、果相は過去世において妙光菩薩として法門を聞き、説いてきたことである。十事の成就とは、現見大義因成就、現見世間文字章句意甚深因成就、現見希有因成就、現見勝妙因成就、現見受用大因成就、現見撰取一切諸仏轉法

輪因成就、現見善堅実如来法輪因成就、現見能新入因成就、現見憶念因成就、現見自身所經事因成就であり、これらにより經文がさらに解説される。

## (二) 方便品

前章と同じように、まず、章の冒頭から五何法までの經文が引用され、それに対する語句解説が始まる<sup>(4)</sup>。そのうち、「舍利弗に告げたもう」の句については、諸菩薩に告げない理由を五義あげ、声聞のなすべきことであり、声聞を廻心して大菩提に趣向させるためであり、声聞が怖れに怯弱であることから護り、他の人にも思念させるためであり、声聞に「なすべきものを既になした」という心を起こさせないためとされる。続く「諸仏の智慧は甚だ深くして無量なり」の句については、大衆に尊重心を生じさせ、如来の説法を聞こうと思わせるために二種の甚深なる義を示すとする。すなわち、証の甚深と阿含の甚深で、前者は、義と実体と内証と依止と無上とであり、それぞれ諸仏の智慧の甚深無量と、智慧の門が見難く、覚り難く、知り難く、解し難く、入り難く、声聞独覚は知ることができないからとされる。阿含の甚深は、受持読誦、修行、行の結果、増長した功德、快妙な事についての心、無上、入ること、声聞独覚と不共なる所作住持との八種をあげ、それぞれに対応する經文が言及される。

続いて、「諸仏如来は自在に因の成就を説くが故なり」の句については、如来が四種の功德を成就することで衆生を度すことができるとし、四種の功德成就が説かれる。すなわち、第一の住の成就是「種々の方便」により兜率天より退いて涅槃に入ることが示されており、第二の教化の成就是「種々の知見」により染と浄の原因が示されており、第三の功德の畢竟の成就是「種々の念觀」により説法の因縁と如法の相応が示されており、第四の「種々の言辭」により四無礙智により衆生に説かれることが示されている。また、これらの方便、知見、念觀を解説した後、さらに、これらの四種の成就を再論する。そのうち、第三の成就までの根拠は、それぞれ、化せられる衆生が善知識に依り成就するから、根熟の衆生を解脱させるから、力の自在の浄化により降伏するからとし、第四の成就については、さらに種種・言語・相・堪えること・無量の種・覺体・修行法を説くことの七種の

成就に分け、その根拠が示される。また、第二の教化の成就について、証法を与えることと説法を与えることの二種により成就させるとし、この前者により「五何法」を解説する。

これに続く偈頌に対する解説はなく、「その時に、大衆の中に諸声聞なる漏尽の阿羅漢……有り」以下の散文が、決定という義、疑という義、何の事に依りてかと疑う義の三義により解説される。第一の決定という義とは、声聞を、方便による法の証得に対する決定心をなしたものと、声聞道において方便による涅槃の証得を得たものとの二種に決定することとされる。第二の疑という義は、声聞などが智を得ることができずに、疑惑を生じることとされる。第三の何の事に依りてかと疑う義は、「声聞の解脱は釈尊の解脱と異ならない」ということに対して疑惑が生じることとされる。

さらに、三止三請の句について、決定心、因授記、取授記、与授記の四種事により経文が解説される。最初の決定心については、恐怖が生じた者の恐怖を断じ、声聞と縁覚の二種の人を利益するために如来の決定心があるとし、前者については、損うこと、多いこと、顛倒すること、後悔すること、欺かれることの五種の恐怖があげられる。第二の因授記は、「止みなん、止みなん、舍利弗よ、須く復た説くべからず」の句が相応し、皆が恐怖を生じさせることに、大衆に甚深なる妙境界を推求させて、尊重心を生じて如来の説を聞こうとさせ、憎上慢声聞を法座から起去させる三種の意義を指摘する。また、三請の意味については、二度目は、過去に無量の衆生を教化したことを示すためであり、三度目は、今仏が衆生を教化することを示しているとする。第三の取授記は、舍利弗らが授記を得ようとすることである。第四の与授記については、未だ聞いていない者に聞かせること、説くこと、いずれかの義に依ること、とどまらせること、法に依ること、遮断することとの六に分け経文が解説される。このうち、聞かせることは、優曇鉢華のようなものである。説くことは、三乗を説くことである。義に依ることは、一大事として、如来の一切智の無上の義、二乗の同の義、二乗による真実に対する不知の義、如来の智業の不退転の義の四種があげられ、疑心の者に示し、発心しない者を悟入させ、外道の者を悟らせ、声聞を菩提に入れることとされる。とどまらせることは、一仏乗を説くことである。法に依ることは、一仏乗のために譬喩と因縁と念観と方便を説くことである。遮断することは、二乗を遮断することである。

とである。この六種の授記により五何法が示されるとし、「何等の法」は、未だ聞かれていないからであり、「云何が法」は、種々なる言辞により説かれるからであり、「何の似き法」は、一大事のためにであり、「何の相の法」は、衆生の器に随うからであり、「何の体の法」は、一乗の体があるからである。

方便品のこれより以下の経文については、四種の疑心を遮断するためであるとされる。すなわち、いつ説かれるのか、どうして増上慢であると知るのか、どうして説くことに堪えるのか、どうして如来は妄語をなさないのか、という心を断じるためであると、経文が解説されている。

### (三) 譬喩品

譬喩品では、章の冒頭の句ではなく、第五偈と第六偈のみが引用され、この偈は「舍利弗が自らの呵責を述べたものである」と解説される。すなわち、経文の三十二相、金色の光明、十力、十八不共法、解脱、一切法の平等は、諸仏を見ず、仏の所に往き仏の説法を聞かず、諸仏を供養恭敬せず、衆生を利益することなく、法を未だ得ずに退いていることに対する呵責を述べたものとされる。

続いて、これより以下の解説について、「煩惱の染性を具足する衆生のために七種の喩が説かれ、無煩惱の人の三昧と解脱と身などの染慢を対治するために三種の平等が説かれる」と述べ、中盤の章が言及される。まず、七喩については、煩惱染性を具足する七種の衆生が、七種の増上慢をもち、それが七種の譬喩によりどのように示されているのか解説される。すなわち、最初の勢力を求める人は、煩惱により顛倒して有漏の果報などの功德を求める増上慢をもち、その対治として「譬喩品」<sup>(4)</sup>の火宅の譬喩により、種々の善根と三昧の功德となる方便を示すことで大涅槃に入らしむことが説かれている。第二の声聞の解脱を求める人は、声聞乗と如来乗は無差別であるという声聞の一向決定の増上慢をもち、その対治として「信解品」の窮子の譬喩により、三乗を一乗とすることで大乘に入らしむことが説かれている。第三の大乘の人は、声聞と独覚の乗はないと顛倒する大乘の一向



決定の増上慢をもち、その対治として「藥草喩品」の雲雨の譬喩により、種々なる乗を知らしむことで諸仏の平等な説法で衆生の善根の種子のままに芽が生じることが説かれている。第四の定がある人は、涅槃がないのに涅槃の想が生じているという増上慢をもち、その対治として「化城喩品」の化城の譬喩により、方便により禪と三昧の涅槃を過ぎて大涅槃の城に入らしむことが説かれている。第五の定がない人は、過去に大乘の善根があっても、それを覚知しないで、虚妄なる解を一乗と散乱する増上慢をもち、その対治として「五百弟子受記品」の衣裏繫宝珠の譬喩により、過去の善根を憶念して三昧に入らしむことが説かれている。第六の功德を集める人は、大乘の法を聞いても大乘ではないものを取る増上慢をもち、その対治として「安樂行品」の譬喩により、大乘の法を説くことで諸仏が密かに授記を与えることが説かれている。第七の功德を集めない人は、一乗において諸善根を集めず、一乗を聞いてもそれを一乗としない増上慢をもち、その対治として「如來壽量品」の医師の譬喩により、未熟の根を成熟させることで涅槃を得ることが説かれている。

三種の平等については、三種の顛倒する信を対治するために三種の平等が説かれるとする。最初の種々の乗の異を信じる者には、声聞授記により乗の平等が説かれている。第二の世間と涅槃の異を信じる者には、多宝如來の涅槃により世間と涅槃の平等が説かれている。第三の身の異を信じる者には、多宝如來が涅槃の後に復身を現すことにより自身と他身の平等が説かれている。これらの三種の人は、自分の身の所作の差別を見ることが、これが仏性の法身と平等であることを知らないで、その対治として声聞に授記がなされたとし、声聞授記に関する問答が述べられる。すなわち、声聞が成仏するから授記を与えたのか、成仏しないのに授記を与えたのか、という問いに対して、「如來はこの三種の平等により一乘法を説かれた」として、授記の解説が行われている。

続いて、この授記は、仏の記する五つと菩薩の記する一つとの六処において示現するとされる。前者は、「譬喩品」において衆が知る別々の名前で舍利弗と大迦葉に別に記を与えたものと、「五百弟子受記品」において同一の名前で富楼那などの五百人、千二百人などに同時に記を与えたものと、「授学無学人記品」において衆が知らないで同一の名前で記を与えたものと、「見宝塔

品<sup>(43)</sup>」において提婆達多に別に記を与えたものと、「勸持品」において在家と出家の女性が菩薩行を修して仏果を証することを示すために比丘尼と諸天女に記を与えたものである。後者は、「常不輕菩薩品」において衆生に仏性があることを示すために菩薩が記したものである。また、声聞には、決定声聞、増上慢声聞、退菩提心声聞、応化声聞の四種があり、後の二つは如来の授記であり、前の二つは、根が未熟なので如来が授記しないが、方便により菩提心を生じさせるために菩薩が授記するとされる。

さらに「譬喩品」の「我が身を離れず」とは無上義であるとし、十種の無上義により各章を略説する。最初の種子の無上は、「藥草喩品」の雨の譬喩により、第二の行の無上は「化城喩品」に説かれる大通智勝如来の前世の物語により、第三の増長力の無上は、同じく「化城喩品」の店主の譬喩により、第四の令解の無上は「五百弟子受記品」の衣裏繫宝珠の譬喩により、第五の清浄国土の無上は「見宝塔品」の多宝如来の塔により、第六の説の無上は「安樂行品」の譬中明珠の譬喩により、第七の教化衆生の無上は「從地涌出品」の無量の菩薩摩訶薩が地中より涌き出る譬喩により、第八の大菩提成就の無上は、応仏・報仏・法仏の三種の仏の菩提が示される「如来寿量品」の経文により、第九の涅槃の無上は「寿量品」の良医の譬喩により、第十の勝妙力の無上は残りの経文により説かれるとする。

また、無上義の第五の清浄国土無上については、諸宝の莊嚴を示現するからとして、さらに八項目により「見宝塔品」を解説する。すなわち、塔が「如来の舍利の住持」を、量が「一切仏土清浄莊嚴は出世間清浄無漏善根が生じるところであるが、世間有漏善根の生じるところではない」ということを、略が「多宝仏の身は一体として一切諸仏の真法身を摂取する」ということを、住持が諸仏如来の法身の自在力を、無量の仏の示現が所作の諸業の無差別を、穢の遠離が一切諸仏国土の平等清浄性を、多宝が一切諸仏国土の同実性を、同一の塔の坐が「化仏と非化仏と法仏と報仏などは大事のためになすのである」ということを示現しているとする。

「分別功德品」以下については、法力と持力と修行力により各章が分類されている。そこでは、經典の内容をこれらの諸力により説明するのではなく、これらの諸力を各章に配分することで、後半の構成が説明されている。そのうち、最初の法力について

は、証門と信門と供養門と聞法門と読誦持説門の五門に分け、最初の四門は「分別功德品」の經文により解説され、第五門は「隨喜功德品」の經文により解説される。持力については、「法師品」の經文を引いて解説される。修行力は、さらに説力と行苦行力と護衆生諸難力と功德勝力と護法力の五つに細分化され、説力は「神力品」の句を引いて解説され、行苦行力は「藥王菩薩本事品」と「妙音菩薩品」に、護衆生諸難力は「觀世音菩薩普門品」と「陀羅尼品」に、功德勝力は「妙莊嚴王本事品」に、護法力は「普賢菩薩勸發品」と後品<sup>(44)</sup>に示されるとする。これらの後半の構成の解説に続いて、「觀世音菩薩普門品」の句が引用され、諸仏の名号受持による功德の解説が補足される。

本論は、「第一の序品は七種の功德成就を示現す。第二の方便品に五分有り、二を破し、一を明らかにすることを示現す。余の品は向きの如し。処分すること解し易し」で結ばれているように、「序品」と「方便品」のみが詳細に語句解説されており、その他の章は、その主題が述べられるのみである。このことから、著者は『法華經』の主要テーマを「方便品」に説かれる一乗および声聞授記と考えていたことがわかる。

# 注

- (1) 大竹晋『元魏漢訳ヴァスバンドゥ釈經論群の研究』大蔵出版、二〇一三。
- (2) 大竹晋『新国訳大蔵經 能断金剛般若波羅蜜多經論积他』大蔵出版、二〇〇九、一八九―二二五頁。
- (3) 竹村牧男・大竹晋『新国訳大蔵經 金剛仙論上・下』大蔵出版、二〇〇三、二〇〇四。
- (4) 大竹晋『新国訳大蔵經 能断金剛般若波羅蜜多經論积他』大蔵出版、二〇〇九、六七―一八八頁。
- (5) 大竹晋『新国訳大蔵經 法華經論・無量寿經論他』大蔵出版、二〇一、九九―二八〇頁。
- (6) 大竹晋『新国訳大蔵經 十地經論Ⅰ・Ⅱ』大蔵出版、二〇〇五、二〇〇六。
- (7) 大竹晋『無量寿經優婆提舍願生偈』解題『新国訳大蔵經 法華經論・無量寿經論他』大蔵出版、二〇一、二八―三五六頁。また、山口益『世親の浄土論』法蔵館、一九六二、小谷信千代『世親浄土論の諸問題』東本願寺出版部、二〇一二、同『真宗の往生論』法蔵館、二〇一五、海野孝憲『世親の浄土論と瑜伽行唯識』山喜房佛書林、二〇一六も参照。
- (8) 大竹晋『元魏漢訳ヴァスバンドゥ釈經論群の研究』三二―三四九頁。



- (9) 大竹晋『新国訳大藏經 法華經論・無量壽經論他』四六七―五二二頁。
- (10) 右同三五七―三八八頁。
- (11) 右同三八九―四六四頁。
- (12) 右同一九―九七頁。
- (13) 大竹晋『元魏漢訳ヴァスバンドウ釈經論群の研究』二八一―三二一頁。
- (14) 右同二二〇―二八〇頁。
- (15) 右同一二二―一三九頁。
- (16) 中御門敬教「世親作『仏隨念広註』和訳研究―前半部分・仏十号に基づく三乗共通の念仏觀―」『佛教大学総合研究所紀要』第一五号、二〇〇八、一〇五―一三〇頁、藤仲孝司「世親作『仏隨念広註』和訳研究―後半部分・大乘特有の念仏觀―」『佛教大学総合研究所紀要』第一五号、二〇〇八、一三一―一五二頁。
- (17) 堀内俊郎「世親作」の論書について『頌義集 (Gāthāṭhasaṃgraha)』研究』『日本西蔵学会々報』第五一号、二〇〇五、一五一―二三頁。
- (18) 伊藤瑞叡『華嚴菩薩道の基礎的研究』平楽寺書店、一九八八。
- (19) Jens Braarvig, *Akṣayamūrtiśāstra*, 2 vols. Oslo: Solum Forlag, 1993.
- (20) チベット大藏經には、カマラシーラによる『能断般若波羅蜜多金剛能断広註』（東北三八一七、大谷五二一六）も存在する。
- (21) 無著は、『仏隨念經』、『法隨念經』、『僧隨念經』の三經に対する注釈書を著しているが、世親の複注が存在するのは本論のみである。堀内俊郎「『仏隨念注』・『仏隨念広註』に対する文献学的研究―Arhaviṣṣayāsūtrānibandhanaとの対比で―（一）―（二）』『東洋学研究』第五五号、二〇一八、九九―一六頁『国際哲学研究』第九号、二〇二〇、一三三―一四九頁。
- (22) 菅原泰典『經集部小経解題』私家版、二〇〇〇、三〇六―三二〇頁。
- (23) 松田和信「ヴァスバンドウの『縁起経釈論』についての中間報告」『大谷学報』第六四卷第二号、一九八四、五二―五三頁。Yoshinori G. Muroji, *Vasubandhu's Interpretation des Pratītyasamutpāda*, Stuttgart: Franz Steiner Verlag, 1993. 参照。
- (24) チベット語訳の『仏母能断金剛般若波羅蜜多七義広釈』は、漢訳ではアサンガの著書とされている（『金剛般若論』大正一五・一〇）。
- (25) 736 *Phags pa Dam pai chos pad ma dkar poi bshad pa / slob dpon Ba su ban dhus mdzad pa* 川越英真『dkar chag 'Phang thang ma』東北インド・チベット研究会、二〇〇五。
- (26) *bsTan pa rgyas pa rgyan gyi nyi 'od*. Kurtis R. Schaeffer and Leonard W. J. van der Kuip, *An Early Tibetan Survey of Buddhist Literature: The bsTan pa rgyas pa rgyan gyi nyi 'od of bCom ldan ral gri*. Cambridge: Harvard University Press, 2009, p. 156.
- (27) 大正第九九卷「昭和法華總目錄」二五番、二二七下。庄司史生「チベットの仏典目録にみられる漢文蔵訳文献について」『日蓮教学教団史の諸

- 問題』山喜房佛書林、二〇一四、七五―七六頁。
- (28) 西岡祖秀『ブトゥン仏教史』目録部索引Ⅱ『東京大学文学部文化交流研究施設研究紀要』第五号、一九八一、五五頁。
- (29) ただし、前者の情報が、文献そのものを確認せずに、『バンタン目録』に基づいている場合は、それよりも以前に失われていたことになる。また、『至元法宝勘同総録』の情報を考えると、漢訳からのチベット語訳の可能性も排除できない（大竹晋『無量寿経優婆提舍願生偈』解題）『新国訳大蔵経 法華経論・無量寿経論他』大蔵出版、二〇一〇、一四四頁。ちなみに、チベットの目録では、漢文からの翻訳は別に項目を設けているが、中国文献からの翻訳を意味しており、インド文献の漢訳からの翻訳を必ずしも含んでいない。
- (30) 望月海慧『世親「法華論」のチベット語訳は存在したのか』『花野充道博士古稀記念論文集』（印刷中）を参照。
- (31) 望月海慧『法華玄賛』のチベット語訳の特徴』『Critical Review for Buddhist Studies』第一七号、二〇一五、六〇―六二頁。
- (32) 池邊宏昭との共著となっている。
- (33) Terry Rae Abbott, *Vasubandhu's Commentary to the Saddharmapundarikasutra: A Study of Its History and Significance*, University of California, Berkeley, 1985, Thesis.
- (34) 奥野光賢『仏性思想の研究』大蔵出版、二〇〇二、三七―九四頁。中井本勝『吉蔵撰「法華論疏」の文献学的研究（一）―（三）』『智慧のともしびーアビダルマ仏教の展開―中国・朝鮮半島・日本篇』山喜房佛書林、二〇一六、一六三―一八九頁、『身延論叢』第二号、二〇一七、二一―四一頁、『法華文化研究』第四三号、二〇一七、二五―六七頁。
- (35) 金炳坤『義寂釈義一撰「法華経論述記」について』『印度学仏教学研究』第六三巻第一号、二〇一四、四三―四八頁、金炳坤・桑名法晃『義寂釈義一撰「法華経論述記」の文献学的研究（一）―（四）』『身延山大学仏教学部紀要』第一五号、二〇一四、一九―四三頁、『身延論叢』第二〇号、二〇一五、五五―六九頁、『法華文化研究』第四一号、二〇一五、三七―五七頁、『身延山大学仏教学部紀要』第一六号、二〇一五、二三―三八頁。
- (36) 浅野学『田珍「法華論四種声聞日記」をめぐる』『仙石山仏教学論集』第一〇号、二〇一八、二三―三八頁。
- (37) 武本宗一郎『最澄鈔「法華論科文」訳註』『論叢アジアの文化と思想』第二八号、二〇二〇、二四二―三六三頁。
- (38) 大竹晋『妙法蓮華経優婆提舍』解題』『新国訳大蔵経 法華経論・無量寿経論他』大蔵出版、二〇一〇、一二七―一三〇頁参照。
- (39) 以下の概要は、望月海慧『インドにおける法華仏教の展開』小松邦彰・花野充道編『法華経と日蓮』シリーズ日蓮第一巻、春秋社、二〇一四、七〇―九九頁に基づくものである。河村孝照『法華論』解題』『法華文化研究』第二五号、一九九九、一―一三も参照。
- (40) 藤井教公『世親「法華論」訳注（一）』六二―六三頁では、「以得同摂功德義故」の句を菩薩功德成就の末尾にかけ、菩薩の功德が仏と同じであると読むが、ここでは声聞と菩薩の共通性と理解する。
- (41) ただし、前章では全体の構成を七成就とし、内容を配置していくのに対し、本章では直接に経文の語句を解説しており、注釈スタイルの違和感

を感じる。

(42) 『法華論』では、章名に対する言及はないが、意味を解り易くするために、章名を補っている。これについては、次の授記の六処の説明においても同様である。

(43) 世親が見たであろう『法華経』には、「提婆達多品」が独立していなかったと想定することができるので、「見宝塔品」とする。

(44) 「後品」とは、梵本では最終章である「嘱累品」のことであろうか。